

## 危機の今だからこそ前向きに

上 廣 哲 治

昨年十二月に中国の一地域で確認された新型コロナウイルスによる感染症は、今年に入ると猛威をふるいはじめ、あつという間に全世界を恐怖と不安に陥れました。ご承知のとおり、夏に予定されていた東京オリンピックの開催は一年延期が決定されました。わが会においても、朝起き実践、普及実践が自粛に追い込まれただけではなく、会創立以来はじめて、春季大会・講演会をすべて中止するという苦渋の決断も余儀なくされました。この原稿が掲載される時点で、どのような状況になっているのかはまったく想像できませんが、事態がすこしでも改善に向かっていくことを強く願わずにはいられません。

問題となっている病原体は、目で見ることができず、存在の気配すら感じることができません。その得体の知れなさが、私たちをいっそう不安にさせているのでしょう。正体のわからないものに對する不安を、先人は「幽霊の正体見たり枯れ尾花」ということわざに表しました。幽霊だと思つて恐れているものをよく見たら、枯れたスキの穂（尾花）だったというわけです。怖い怖いと思つて見ると、なんでもないものまで恐ろしいものに見えてくるというのです。

もちろんコロナウイルスが「枯れ尾花」だというのはありませんし、その爆発的な感染力を正しく恐れることは大切です。しかし、正体のわからないものへの恐れは、時として人々を尋常でない行動に駆りたてることがあります。十四世紀のヨーロッパでは、「ペストの流行はユダヤ人のせい」という根も葉もない噂から、一万人以上のユダヤ人が殺されました。日本でも関東大震災のときに、「井戸に毒を投げ入れた」「放火した」などという流言によって数多くの朝鮮人が虐殺されました。

今日のウイルス禍においても、欧米では中国人をはじめアジア人へのいわれのない差別や暴力沙汰など、多くの卑劣な言動が報告されています。国内でも、電車の中でちよつと咳き込んだことが大きなトラブルに発展したり、ドラッグストアの前でマスクの購入をめぐる争いが頻発したりしています。

マスクや消毒液の不足が医療現場に深刻な影響を与える一方で、危機感に駆られて買いだめに走る人や、転売目的で買い占める人が現れ、インターネットでは法外な値段で「戦利品」の売買が行われています。店頭から消えたのはマスクだけではなく、トイレトペーパーやティッシュペーパー、紙おむつなどを買いたい求めているために、ドラッグストアやスーパーの前には朝早くから行列ができました。米や即席麺などの食料品を買いだめする人も多く、東京では、知事が外出を控えるよう訴ええると、生鮮品から冷凍食品のコーナーまで、食品がすっかりなくなってしまう事態が生じました。

人は自分の判断に自信がなくなると、周囲の多数意見を無条件で鵜呑みにしがちです。社会心理学ではこれを「社会的証明の原理」と呼んでいます。自分の舌で料理を評価するのではなく、店の前に行列ができてくるのを見て「この店はおいしいに違いない」と判断することなどは、典型的な「社会的証明」といえるでしょう。テレビの通販番組でも、商品を紹介した後、「申し込みの電話が混み合っていて、

つながりにくくなっています」とひと言を加えるだけで、売り上げは大きく伸びるといわれます。

このように周囲の動きに同調してしまう傾向は、人が恐怖心や不安感に襲われたとき、いつそう増幅されていきます。トイレットペーパーの供給量が少なくなっているわけではないのに、また家には十分に備蓄があるのに、「みんなが買っているから」という理由だけで多くの人が店に殺到しました。さらに、空っぽになった棚の映像がテレビで繰り返し流れると、買いだめに否定的だった人まで慌てはじめます。そのあげく、本当に必要な人のもとに商品が届かなくなってしまうのです。

今年の二月末、コロナウイルスの感染が深刻になったイタリアで、休校中の高校のホームページに掲載された、ある校長先生のメッセージが話題になりました。

彼は、作家マンゾーニが『いいなづけ』という作品でベストの流行について描写していることを紹介しながら、次のように記しています。「この本の中には、外国人を危険だと思ひ込んで、……最初の感染源は誰か、といういわゆる『ゼロ患者』の搜索、専門家の軽視、感染者狩り、根拠のない噂話やばかげた治療、必需品を買いあさり、医療危機を招く様子が描かれています」。そして、この小説を読んでいると、まるで今日の新聞を読んでいるような気になります。

さらに校長先生は、感染の危機における「最大のリスク」は「社会生活や人間関係の荒廃、市民生活における蛮行」であるといい、「見えない敵に脅かされた時、人はその敵があちこちに潜んでいるかのように感じてしまい、自分と同じような人々も脅威だと、潜在的な敵だと思ひ込んでしまう、それこそが危険なのです」と指摘しています（二〇二〇年三月二日、共同通信社配信記事より）。

私たちもまた、この先生と同じように「社会生活や人間関係の荒廃」に対する危機を感じています。

ウイルスの感染拡大を防がなければならないのは当然ですが、それとともになんとしても防がなければならないのは、不安のなかであらわになってきた「倫理力」の衰退です。「今がよければそれでいい」「自分さえよければいい」という気分の広がりによって正面から向かい合い、そのような利己的・利己的な気分が結局は「今」にとっても「自分」にとっても無益であることを訴えていく必要があるのです。

倫理の「倫」は「なかま、ともがら」を意味します。すなわち倫理とは、自分一人ではなく、さまざまな人々とともに生きるための筋道を表しているのです。私たちはそれを、「我も人も人の仕合わせ」と言っています。たった一人で生きていくことができないこの世界では、周りの人々の仕合わせがあつてはじめて、自身も仕合わせになることができる。そう考えることが、倫理を支える柱になるのです。

例えば、不要不急の外出を控えるのは、「自らを守るため」だけではなく、なによりも「ほかの人に感染を広げないため」です。自粛は「自利のため」だけではなく、「利他のため」でもあり、「我も人も人の仕合わせ」のためなのです。

多くの人が今、明日はどうなるのかという不安に脅えています。しかし、不安にとらわれてネガティブになることは、未来に向かって進むための判断力を奪い、他者との共生への道を閉ざしてしまいます。今日のような危機的状況のなかでは、「枯れ尾花」が幽霊でないことを見抜く冷静な判断力が必要です。そしてその判断力は、悲観的な思い込みからではなく、この世界に希望を見出そうとする「上機嫌」の実践のなかからしか生まれてこないのである。

たとえば昨日の希望が潰えたとしても、今日一日、新たな希望をもって生き貫き、明日がより善い日になるよう努力する。そのような前向きな姿勢を忘れず、ともに頑張ってまいりましょう。